

## 「忍川・さきたま調節池（旧忍川）の自然環境の調査・研究

### 忍川・さきたま調節池（旧忍川）の歴史と自然（後半）

<http://oshi.html.xdomain.jp/report/default.html>



栄橋から古墳を眺める

道が古代蓮の里に大分近づいたところで、左岸遊歩道に河畔に降りる階段があり、その下に塞神の石塔「弁才天」が祀られている。その先には、「辯天門樋」がある。これは左右非対称型煉瓦造りの水門であり、右岸から見ると水面に映る姿が美しい。右岸には農業用水用の揚水機場がある。付近には長野落バイパス水路が設けられ、埼玉県行田浄水場内遊水池との間で水位の調節が行われている。



弁才天



辯天門樋

ここで、いったん古代蓮の里の交差点に出てないと、川下に回にまわれない。川下に戻って少し歩くと小針クリーンセンター、行田市粗大ごみ処理場の裏を通る。単調な畦道が続く。

小針クリーンセンターを抜けると、行田浄水場の水を鴻巣方面に送る水管橋がある。アーチ補剛形式の2本の直径1メートル以上の水管が旧忍川を横切る。ここを通りすぎると、ふるさと橋に着く。なんとも懐かしい名前であるが、2007年に作られたばかりの行田市と鴻巣市の境界の橋である。橋の上に立って振り返ると、これまで歩いて来た道が一望できる。



左からふるさと橋、水管橋、小針クリーンセンター

② ふるさと橋～見沼代用水 取水・排水口

ふるさと橋から約 800 メートル東に進むと「小針落とし伏越」に来る。小針落としの終点は野通川の基点になっている。この川は旧忍川を煉瓦造りの古い時代の伏越で横断している。伏越とは、川の立体交差のことだ。要するに旧忍川の下を逆サイフォンで小針落としが流れているのだ。ついでに「落とし」とは下水のことで農業用も含めた不要な水が流れていることを意味している。かつては、小針沼の排水路であったようである。



小針落とし伏越の入口



野通り川起点

小針落とし伏越の入口ところに「野通り川 起点」の石碑がある。ということは、小針落とし伏越のサイフォンの中を流れているのは、野通り川という不思議な構造になっている。野通り川（やどおり川）とは、不思議で素晴らしい名前である。重箱読みだが、かつては埜通（やどおり）悪水路と呼ばれていたという。

小針落とし伏越から 200 メートル程で、「長野落とし伏越」に来る。レンガでできていた小針落とし伏越に対して、こちらは雰囲気のあるコンクリートでできている。長野落伏越は昭和 8 年（1933）に完成した。長野落の流れはかつて見沼代用水に接続されていたが見沼代用水の水位が高く、逆に浸水が発生したため、昭和初期の「元荒川・支派川改修事業」により、旧忍川を伏越して横断し、約 250m 下流で野通川へ合流させた。

旧旭橋には現在使われてないゲートが3門あり、以前は見沼代用水への放流や取水はここで  
行っていたと思われる。また、ゲート堰柱天端には西洋建築にあるような渦巻装飾が見られる。

旧忍川分水口水門では農業用水が必要な4月から10月頃まではゲートを開いて見沼代用水  
から取水する。農閑期の10月から4月頃まではゲートを閉めて取水を停止する。取水用ゲート  
は1門だが排水用ゲートは2門あり、豪雨等で旧忍川の水位が上昇し、浸水の恐れがある場合  
には水門を開いて見沼代用水へ放流する



長野伏せ越え



長野伏せ越えの後ろの石仏



長野落の伏越

旧忍川旭橋（長野落はこの川底の地下を流れる）



見沼代用水 取水・排水口



台風による増水時の平成橋付近



台風による増水時の旧忍川・共栄橋付近



平成橋付近、濁水時の忍川（11月）



花見橋付近、濁水時の酒巻導水路（11月）

## 4. 忍川の周辺

### （1）小敷田遺跡

花見橋から約3km上流にたどると、小敷田という地名の場所がある。小敷田は、古代に国司、郡司などに与えられた田を意味し、この地名はこれを語源にしているという。ここで昭和63年の埼玉博覧会の前に行った国道17号バイパス工事で発見されたのが小敷田遺跡である。この遺跡は、南は忍川から、北は星川までの広い範囲に渡る。現在、遺跡は埋め戻されてバイパスの下になっているが、ここで2000年前から1000年前頃の方形周溝墓、壺などの土器、木製農具、石鍬、木簡、炭化米など多数が発掘された。特に炭化米は、日本最古の米とも評されている。この地域は、利根川や荒川、また、関東平野の扇状地からの湧水に恵まれた地帯で古代から米作がおこなわれていたようである。古代に農業用の水の確保が簡単であったこの地も、近代は農業に適さない土地に変わっていたようである。バイパス工事時に行われた小敷田の土地改良工事の記念碑によると「小敷田の耕地は、水路ありても用水無く排水の力もなき水災地」と記載されている。この土地も地下水が下がり水の不便な場所に変っていたようだ。しかしこのときに行われた土地改良工事の結果、忍川からの水路や排水路、また、農業用の井戸やポンプが開発された。これにより水路から遠い畑には、加圧式の水道ができ、圃地ではコックを開けると用水が噴き出す仕掛が作られた。農道の横には、消火栓まで設置されていることには驚かされる。長い時間を経て古代の農業適地が形を変えた農業適地に復活したようだ。



加圧ポンプ付の配水設備



圃場に配置された給水弁



用水と消火栓

## (2) 行田の伏流水

湧水（ゆうすい）とは地下水が地表に自然に出てきたものである。さすがに行田では、現在、湧水は存在しない。伏流水（ふくりゅうすい）とは、河川敷や旧河川の下層を流れる地下水をいう。行田は、古くから利根川、荒川、旧河川からの伏流水が豊富だった。かつて、行田では「吹き井戸」というものが普通にあり、井戸から水が一日中休みなく流れ出ていた。

全国に4つ常世岐姫神社という名前の神社があるが、その内、2つが行田にある。1つは埼玉（さきたま）にもう一つは、荒木にあり、こちらは荒木常世岐姫神社とも呼ぶ。本宮は、大阪府八尾市である。この神社によると、古代に帰化した染色技術者集団の赤染氏（常世氏）が祖神を祀ったものと推定できるとしている。荒木の意味は「朝鮮の南部のアラから来た」を意味しているという説もあり、朝鮮南部からの染色技術者が行田の伏流水を求めてこの地に住み着いたということが想像できる。

現在でも行田や羽生に染色工場があることの歴史的意味は不明であるが、染色に必要な大量の水を、この伏流水で賄ってきたということは、創造に難くない。同様にして、この地方では、つくり酒屋が多かったということも酒造りに適した伏流水が豊富であったことということを意味している。



荒木常世岐姫神社



川端酒造

行田の生活用水には、かつて伏流水が主に使われて来た。現在は、伏流水以外に利根川の水を行田浄水場で浄化した水も約 40%使われている。しかし、排水は桶川の埼玉県元荒川水循環センターに送る以外は、今も忍川に流されている。忍川上流では、忍川の水は農業用水としても使われるが、行田市に入ると忍川の用途はほぼ排水であり水の汚れが気になる。

### (3) 猿田彦神社の祠

屋敷橋の先に小さな猿田彦神社の祠がある。祠の裏には、石造りの水神社がある。ここには、次のような説明があった。

「この石塔は『水神社』と云い、水の守り神です。昔は現今のように利水用水・治水等の環境が整備されておりませんでしたので、全国至るところで水飢饉に伴う『水争い』が絶えなかったようです。この地区もその例外でなく水飢饉や村と村との水争いが絶えなかったようです。こんな状況を憂いた袋村の名主だった指田良向さんが文政3年（1820年）忍藩の阿部鉄丸に実情を訴え対応策を陳情した結果、忍藩主の英断で堰が完成し、袋周辺一帯の各村の水不足が収まったそうです。」

このことから二人を水神様と崇めこの水神社石塔ができたそうです。この碑文の最後には、「この石塔は、100メートル東の用水路上にありましたが、この猿田彦神社の境内に遷座いたしました。」と記載がある。文政3年には新忍川は開削されていなかったため、新忍川以前のこの地方の水争いにまつわる物語であるが、貴重な記録である。



水神社石塔

## 5. 忍川・旧忍川（ さきたま調節池 ）の自然

### （1）動物

#### ① 鳥

忍川では、上流から下流の至るところで野鳥の観察ができる。川幅の広がる中流部分が特に良い。鳥の種類により浅瀬を好む鳥と水深によらないものがある。水に浮かんで生活するカモのような鳥は、水深に依らず、どんなところにも生息する。ダイサギのように水の中を歩く野鳥は、水深の浅い部分を好む。鳥の観察がし易いのは、花見橋で川の流れが南に変わってから、佐間水門に至る部分である。この区間には、忍川と玉野用水が平行して南に進む区間であり、二つの川の間は、川の景色を妨害するものがなく野鳥の観察に都合が良い。この区間で最も良く観察できる鳥は、水に浮かぶマガモ、カルガモ、コガモである。大きな鳥ではダイサギ、コサギ、青サギ、カワウなどがよく見られる。



マガモの雄雌



コガモ



カルガモ



コサギ



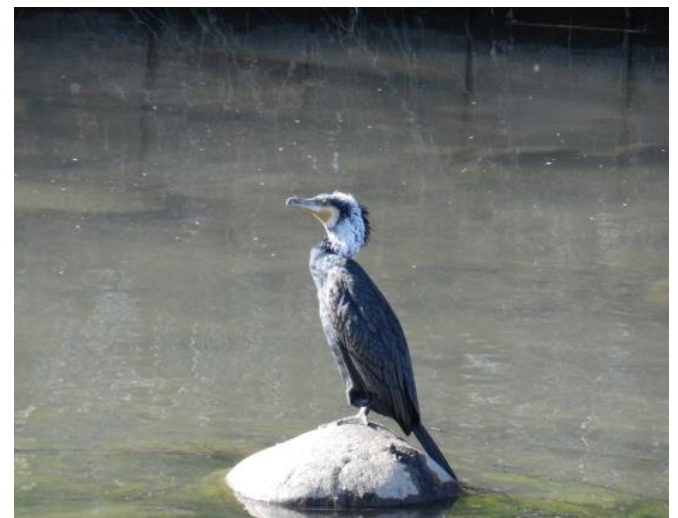
コサギとダイサギ



ダイサギ



青サギ



カワウ

忍川で見られる水鳥は、種類を越えて団体生活をすることが多い。最も群れることが多いのはカモの種類である。マガモは、美しいブルーのカモと茶色のカモと一緒にいることが多い。美しいブルーのカモは、マガモのオスで季節により美しい緑の羽に変わる。メスは茶色のままで、違う種類のカモのペアのように見える。足の長いダイサギや青サギは、川の中に直接立っていることが多いが、足の短いカワウは、石の上に止まっている。カワウも2羽と一緒にいることが多いがオス・メスのペアである。よく見ると顔の羽毛に微妙な違いがあることがわかる。

ダイサギとカルガモの家族が川辺に上がり水中の魚を鋭い目つきでじっと狙っている姿も良く見られる。ダイサギは1羽か2羽でいるのが普通であるが、20から30羽で群れを成すことも良くあり壮観である。ダイサギの大集団は、川の中、土手の上、近くの農地などで見られる。特に旧忍川周辺の広い田圃では、広範囲に渡るダイサギの大集団が見られることがある。さらに大きな鳥たちの集団が見られることがある。カモ、ダイサギ、コサギ、青サギ、カワウなどたくさんの種類の鳥が一ヶ所に集まり集団を作る。忍川では鳥同士の争いはほとんど見られない。しかし、これらの鳥は非常に小心であり、人が近づくことは難しい。

水辺の近くで1羽かペアで尾を上下に振りながら活発に動く小鳥はハクセキレイである。この鳥は浅瀬の近くで水中昆虫を求めて良く鳴いている。ハクセキレイより羽が黒いセグロセキレイもいる。また、イソシギが忍川の下流地域の水際の土の上で見られる。イソシギは映画や映画音楽でも有名である。





ハクセキレイ



セグロセキレイ

旧忍川の下流は、土手に自然が良く残っている。川の中はヨシでいっぱいであるが、このヨシの合間にニホンキジも観測された。



イツシギ



ニホンキジ

以上の鳥以外に、近くには次のような鳥類もいる。

- ・タゲリ
- ・ハシボソガラス
- ・ハシブトガラス
- ・オナガガモ
- ・キンクロハジロ
- ・オオヨシキリ
- ・オオバン
- ・ホオジロ

## ② 昆虫

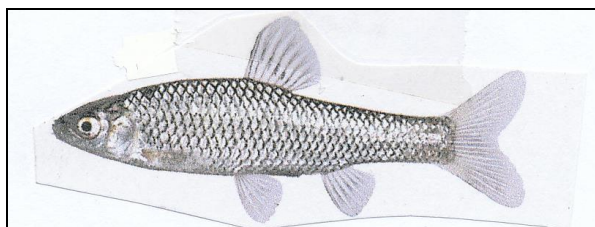
また、付近に昆虫類はたくさんいるが、懐かしいものでは、次のものがある。

- ・羽黒トンボ
- ・オニヤンマ

### ③ 魚介類

魚介類として観察できるものは次のものだが、水質が良くないので、食用としては適さない。

- ・コイ    ・フナ    ・モツゴ    ・ドジョウ    ・ナマズ    ・アメリカザリガニ
- ・クサガメ    ・ミドリガメ（ミシシippアカミミガメ）



モツゴ

### (2) 植物

行田市に入っの忍川は、護岸工事が何度も行われている河川であり、護岸の雑草は都会的なものが多い。特に多いものは、チカラシバ、オオバコ、チガヤ、ドロボウ草などの雑草、また、カラシナなども多い。また、川の中には、ミズクサの仲間がある。



チカラシバ



オオバコ



モミジ



丸墓山古墳とヨシ・チガヤの群落

樹木では、ヤナギ、ソメイヨシノ、マダケ、シノダケなどがある。

旧忍川に入ると、一面のマコモとヨシ（アシ）で驚かされる。旧忍川ではここ数年野焼きを行っていないようで、放置すると植物多様性が失われるような心配がある。



マコモの群落



ヨシ（アシ）の群落

特記すべきものとして、数年前、命名地の北見市（北海道）でも失われてしまったキタミソウが行田の星川で発見されて話題になったが、旧忍川でもそのキタミソウの群生地が共栄橋の少し先の葦の途絶える場所にある。1mm程の小さな白い花が咲いている。目を凝らして見ないと見逃してしまう。



キタミソウ（中心に星形の小さな白い花）



キタミソウの自生地

旧忍川の小針クリーンセンターより東側の旧忍川は、最近まで大きな護岸工事が行われていなかったため、最近あまり見られなくなった植物がここにはある。見られる植物は、イヌタデ（別名は赤まんま）、くず、ノビル、ヨメナ、スミレなどさまざまな野草や低木類がある。

今後、このあたりも今後工事があると思われませんが、これらの貴重な野草の保護もお願いしたいところである。



イヌタデ



くず



ノビル



ヨメナ



スミレ

[引用参考文献]

- 1 忍の水物語 治水と利水 (第 23 回テーマ展) 「行田市郷土博物館」
- 2 荒川の恵み「農林省 関東農政局 大里農地防災事務所」
- 3 堰頭首工の概要「埼玉県農林振興センター 農林整備部 水利調整管理担当」
- 4 おいのある農業を目指して「農林水産省 関東農政局 大里のうち防災事務所」
- 5 未来へ残したい行田の自然八景「行田さくらロータリークラブ みどりのぎょうだネットワーク」
- 6 山溪フィールドブックス 淡水魚「山と溪谷社 著者：森 文俊 内山りゅう」
- 7 第 14 回テーマ展 行田のまちづくり四百年史 (行田市郷土資料館 2003 年)